



みゆきにかきわて

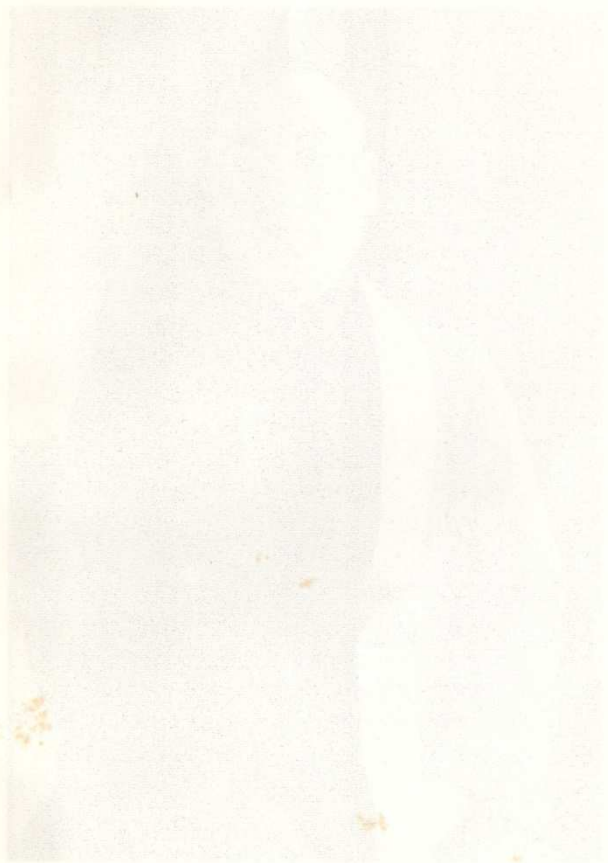
〈付〉専能寺誌

真光山専能寺



ありし日の釋寛了法師

大正十一年三月廿七日  
大正十一年三月廿七日  
大正十一年三月廿七日



通巻十巻巻の目録の表紙

釋寬了法師に捧げる

—五十回忌法要に寄せて—

目次

◇み仏に生かされて……………1  
愛別離のめざめ……………1  
遇法の縁……………4  
有髪の尼として……………6  
戦中の思い出……………8  
響流十方の鐘の声……………9  
◇専能寺誌……………12



愛別離のめざめ

専能寺前坊守 足利 絲 誌す

雨戸を敲く木枯しの音を聞いていると、五十年前死別した夫のことを思い出します。

あの頃も凍てつくような寒い寒い季節でした。他人の死に何遍かあい、つい先年、実父と実姉のつづく死にあいながら、直接日々の生活に支障のない気安さに、深くも考えず過ぎしてしまいました。

若い、丈夫だ、と思ひ込んでいた夫に突然死別した時は、此の世が真暗になり、世の終りかと驚き悲しみました。信心深い母に育てられ、御法義の中で日暮らししてきたのですが、それは、聞いて覚えていただけでした。

東京から駆けつけてくれた母は、遺体の枕許で眠らずにみ法を説いてくれました。「あなたのために死んだのです。信心のないあなたを哀れみ、身をもって無常を

知らせてくれたみ仏のお手廻しです。よろこびなさい。」

と言われました。こんな悲しいことをよろこべとは、と愕然としましたが、実母の言葉です、嘘偽りのあるはずはない。涙をためてみ教えを説いてくれた母の真剣さ。わが娘を悲しみから立ち上がらせたい親心が、一言一言のうちに込められております。言うならば、今死んだ夫が母の口を借りてみ法を説いてくれるように感じられ、切々と胸の底にしみ通る思いがしました。

生死の一大事にぶつかった時は、人間のはからい役にはたちません。悲しかったら泣くのです。泣いた涙で眼の流れるほどに……それでどうなるでしょう。死んだ人は帰ってきません。自力が尽きはてて、はからい離れた涙のどん底に、はじめて三世を通じて永劫に変わらぬ南無阿弥陀仏の大慈大悲の親のふところの中にあることに気付かされていただけなのです。

「釈迦・弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

発起せしめたまひけり」

宗祖親鸞聖人のご和讃（「高僧和讃」善導讃）です。

つねづね、夫のとなえていた念仏にどんな意味があるのか、功德があるのか、利益があるのか、ただ口でとなえるだけではいけないだろう。躊躇するひまはない。念仏の「生起本末」を深く知らなければいけないと、京都ご本山まで聴聞し勉強に行きました。

厳粛な夫の死を契機に、百八十度人生観が転換しました。今までは自分を反省することもなく、相手を批判し不実をせめ、私のみは善しとしてきたことの恥ずかしさ。夫に死なれて流した涙すら相手をいとおしむ優しさではなく、残された自分が哀れで流した涙だったのです。我執の強さ、煩惱の深さ。死に対して一時の慰め、あきらめ、忘却でなく、現実を逃避することなく凝視し、納得のいける指針がほしい、大安心がほしい。

夫の病中から臨終を思い浮べました。わずか二週間ほどの入院でしたが、「俺が死んだら苦労をかける、すまない。」と病の苦しさと年若くして逝く悲しさに堪え、残される者をいたわってくれた優しさに、私は何をもって応えよう。病中枕もとに

置いてあった御聖教を読んでくれ、「歎異抄」の何章を聞かせて、と何遍か言われたのに、死を誘う結果になるような気がして、一度も読んであげなかったことのお粗末さ。一生かかってでも償いきれないことです。

「無慚無愧のこの身にて

まことの心はなけれども

弥陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ」

宗祖親鸞聖人のご和讃（「正像末和讃」）です。

### 遇法の縁

五十年前の鍋沼は自動車の通る道もなく、然も昭和三年暮れから四年にかけて大雪の年でした。大病院入院と決まった朝は一尺余りの積雪。外にはさんさんと雪が降り続いておりました。雨戸を外し竹を渡し布団にくるまって、二十人余りの若い御門徒の方々に替る替る担いでいただいて、雪道を大病院迄送られました。

四十度近い熱のある病人もさぞ辛かったですし、そのことは口に出さず、御門徒の方々に難儀をかけたことを、すまないと涙をこぼして喜んでいたことを忘れません。

一月四日の0時過ぎ、看護婦さんに病人は夜明けまでもちませんよと言われ、呆然としてしまいました。死なんて一若さに頼って考えてもいなかったので。生後七十五日目の赤子を背負って病院の薄暗い廊下を電報打ちに歩いているうちに、息を引きとってしまいました。

専能寺住職として僅か五年です。余りにも淋しい臨終でした。三十一才。

早速死体安置室に移され火の気もない処に夜明けを待ちました。まだ外の暗い時、一番先に駆け付けて下さったのが、元高砂村村長専能寺筆頭総代遠藤音右衛門翁でした。その頃七十才に近かったでしょう。雪道を四時間半かかって来て下さったのです。その時の嬉しく有り難かったこと。身内でも何でもない赤の他人です。専能寺筆頭総代の立場としての責任もあることでしょうが………。

「衆生苦惱我苦惱、衆生安楽我安楽」

そこに如来様のお姿をおがみました。

先祖代々の寺であり御門徒なればこそ

「一河の流れ一樹の蔭、袖触れあうも多生の縁」

親を選ぶこともできないまま此の世の父母の許に生をうけた私。前世、前々世、佛教に説く、過去現在未来の三世。昨日今日明日。瞬間瞬間と考える、時の流れ。三世は絶えることなく流転しながら永劫に続くものだと知らせてもらい、商家に生まれた私が何故に、専能寺の如来様、御門徒の方々と共に生かしていたゞく御因縁を結ばしていただいたのか不思議です。

もう一言いうならば、私自身専能寺に来なければ、み仏の教え一南無阿弥陀仏一に遇うこともできなかつた者です。

### 有髪の尼として

有髪の尼（女のおしろうさん）にお経をあけてもらっても有り難くない、それをもっともです。その頃、東北に有髪の尼は私一人。しかも他所者です。家庭に複雑

な事情もあって、いろいろ批判も受けました。しかも浄土真宗は世襲がたてまえです。それに、私のため死んでくれた夫に対して、寺らしい有り方にするためには、この道一筋しかなかったのです。

念仏に支えられ、わが子と共に雨の日・風の日・宿業のまにまに御門徒の御協力のもとにその日その日を過ごさせてもらいました。

昭和十四年、寺の母まさ死去。同年、専能寺役僧として御協力いただいた庄司教海師も八十二才で亡くなりました。農家の次男として生まれたのですが、信仰心の上から四十二才で得度、四十年の長い歲月、御法義のため法務を手伝って下さいました。小学校の祝日には必ず出席、小学生を前にして

「若いとて年をたのむな弥陀たのめ

無常の風はときをきらわず」

といつも聞かせていたとか、今でも年配の人は思い出して懐んでおります。

昭和十七年、義兄恵秀が逝き、専能寺は母子三人になりました。

## 戦中の思い出

昭和十六年、太平洋戦争になり、戦局はいよいよ拡大し、日増しに苛烈になり、蒲生沖にアメリカの艦載機が姿を見せ、毎日十五・六機編隊で機銃掃射です。高砂地区で四・五人亡くなられました。農村に住みながら食糧にこと欠くようになり、葬式も逃げかくれしながら行ないました。勿論、蠟燭、線香もありませんでした。仙台市内空襲、昭和二十年七月九日夜半より十日未明にかけてのことでした。わたしの寺は市内中心部から東に二里半、寺前でどうしようもないまゝ、呆然と見ておりました。

旧制第二高等学校校道交寮も直撃でやられてしまいました、一週間か十日ほど寮生を預ってほしいと故岩本正樹先生（岩本病院長）から連絡がありました。市内でもなし、再度空襲に会うなぞ考えられない田舎なので、快くお引受けしました。翌日、大雨の中傘もささず、着のみのまま裸足で三三五五学生さんが集まって来ました。幸い寺なので本堂庫裡も広いし、大釜大鍋は揃っているし、田圃の真中、米だけはなんとかなるはずだし、夜具は夏なので心配することもなく、一応皆さん

に落着いてもらうことができました。

一週間か十日ほどということが、段々事態が悪化して、学生さん達も動きがとれなくなっていました、四ヶ月専能寺で暮らしてしまいました。鉤取の学校に通う者、原町の陸軍工廠に働きの者、若人といえ、満足な履物のないまま二里三里の道を裸足で通う姿が今でも忘れられません。

その間、蒲生沖にアメリカの航空母艦が浮上し、艦載機が飛来し、人家といわず田畠といわずバラバラ撃ってきます。毎日がどうなるかとお互いが一つ心でいたわり合いながら暮らしました。

八月十五日、終戦のお言葉も共に聞きました。欲望のすべてを戦争にかけ、食事すら腹一杯食べられず、青春を棒にふって頑張ってきた青年の胸にどう受けとめられたのでしょうか。

## 響流十方の鐘の聲

それから二十八年後、道交寮の皆様から百五十貫の梵鐘が専能寺に寄贈されました。



た。

灯火管制のきびしい時、ぼろ蕙をかけた庫裡の炉辺でお茶をのみながら、供出した梵鐘の話ができたことがありました。証文を取ったわけでもなし、催足するわけでもなし、当てにしないといえれば嘘になりますが、ただ単にお茶のみ話とすればそのままたまのみに、只今三十八名の一人々のまごころが梵鐘となって本堂の前にあります。

医者・弁護士・社長・市長・学校の先生・新聞記者等々、それぞれの立場で社会の重責を荷い、錚々たる働きを続けております。

本堂の阿弥陀様のお顔をおがみながら、百日余り起臥を共にした御縁でしょう、御慈悲は毛穴からでもしみ通ると聞いております。皆様の至誠心を一番よるこんで下さったのは専能寺の如来様です。

以後、朝夕欠かさず鐘をならし続けております。時を知らせるためではありません。み仏のお慈悲にまもられながら、安らかに今日一日を力強いそいそと日暮らしさせていただく身の倅せを、共によるこばせていただくお呼声を受けていただきたい念願です。

梵鐘の銘には

「正覚大音 響流十方 念仏衆生 撰取不捨 南無阿弥陀仏」と刻まれております。

聖人のおほせには、善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如来の御こゝろによしとおぼしめすほどに、しりとをしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。

(「歎異抄」後序)

# 専能寺誌

## 歴代年譜

いんげん

世代	法名	事	項
一世	釈栄覚	野州梁田郷足利氏一族の所領地（現在の栃木県足利市鵜木町）に出生。同地の天台宗浄光寺に修学すること三十有余年。のち親鸞聖人の教えに帰依し、専修念仏を修し、本願寺顕如上人の許に得度。その後東北に巡錫。天正十九年（一五九一）専能寺を開基。在院二十年。のち本国に帰り、元和三年（一六一五）六月七日、七十二才没す。	
二世	釈栄念	下野国真壁に出生。栄覚の直弟となり、栄覚帰国後入寺。寛永八年（一六三二）正月四日、六十八才没す。	
三世	釈栄心	承応二年（一六五三）十二月十四日、六十二才没す。	
四世	釈祐栄	十八才にて江戸に修学。寛文五年（一六六五）八月十二日、三十二才没す。	
五世	釈栄順	享保十三年（一七二八）五月二十三日、五十三才没す。	
六世	釈栄吟	宝暦三年（一七五三）六月二十九日、四十七才没す。	
七世	釈栄覚	寛政八年（一七九六）二月四日、六十才没す。	
八世	釈貫道	文化十年（一八一三）五月二十七日、四十四才没す。	

九世	釈覚道	安政五年（一八五八）四月七日、六十三才没す。
十世	釈惠淳	山形市寺町大谷派浄善寺に出生。天保四年（一八三三）二十二才に当山へ入寺。本堂再建、安政二年（一八五五）山門・梵鐘・鐘楼堂建築、その他内陣莊嚴一式相整える。その間二十年を要した。明治二十六年（一八九三）七月一日、八十二才没す。塩釜雲上寺の俳僧水鶏庵任阿に就いて俳諧を学び、その号を襲うて水鶏庵一阿と号す。鎌田甫山馬淵・梅の屋河玉及び中ノ目物外等と交遊すこぶる厚きものあり。 。まい鶴は富士よりたかし日永哉 。みな酔ふに酔はで恥かし桜かな
十一世	釈惠海	大正四年（一九一五）十二月二十六日、八十一才没す。
十二世	釈惠恩	大正十二年（一九二三）十一月二十七日、六十一才没す。
十三世	釈寛了	日本大学真宗学科卒業。昭和四年（一九二九）一月五日、三十一才没す。

### 《現住職》

十四世 釈寛之

昭和三年（一九二八）に出生。昭和十二年（一九三七）得度。昭和

二十六年（一九六一）三月、竜谷大学仏教学科卒業。同年、住職就任。

近年の歩み

- 昭和二十七年（一九六二）
- 昭和四十三年（一九六八）
- 昭和四十九年（一九七四）

庫裡新築

墓地整理

本堂屋根銅板改修、書院廊下新築。

梵鐘（旧制第二高等学校校道交寮生三十八名寄進）

鐘樓堂（塩釜伊保石、庄子正助寄進）

改修工事当時の総代

遠藤小三郎、芳賀光男、吉田源弥、佐藤善蔵、小野徳十郎、佐藤勇蔵  
大場清之進、菅野鉄之助、鈴木金蔵、青木健寿

専能寺現役員

総代

遠藤小三郎、芳賀光男、吉田源弥、佐藤善蔵、小野徳十郎、青木健寿、伊藤新治  
菅野金弥、片桐勝七、大場伝四郎

仏教壮年会

（会長）庄司正衛 （副会長）鈴木誠三郎、角田健一 （会計）遠藤林之丞

仏教婦人会

（会長）遠藤きよ子 （副会長）阿部みわ子 （会計）黒沢とし子

若草仏教婦人会

（会長）兎玉てる子 （副会長）相原 いね （会計）庄子まさよ

みほとけにかかれて

— 八付▽専能寺誌 —

発行所

昭和五十二年十一月一日  
仙台市蒲生鍋沼一六  
真光山専能寺  
電 (022) 581-3088